

論理を文章化することが社会人文科学のすべてだ

学長 渡辺利夫

社会現象はひたすらの錯綜である。しかし現実が錯綜していればいるほど、これを解きあかず論理は明快でなければならないと私は考える。世の中そんなに単純じゃないよという声が聞こえてきそうである。現実を簡明に論理化することには危うさがともなう。確かに世の中そんなに単純じゃないからである。

しかし、この世の中は同時に多様な論理の競合の場である。自分一人で論理を構成しているわけではない。しばしば相矛盾し拮抗する無数の論理が競い合うことにより、妥当性をもたない論理は現実のしっぺ返しによってつぶされる運命にある。生き延びた論理といえども、その論理によっては説明できない新しい現実が生まれてくれれば、そこで無慈悲にも消滅を余儀なくされる。こんなことは論理の競い合う世界では、実際、日常茶飯なのである。激しい優勝劣敗の競合のなかで、からくも生命を保った論理のみが、真に価値ある論理だということになろう。

われわれの知的努力というのは、こうした無数の「捨て石」を倦まず一生懸命創りだすことなのだと想いを定めるよりほかない。捨て石がいやならものなど書くな、ということなのであろう。真理という冠をもつ論理など滅多なことでは凡俗の私どもには創りだすことはできない。自分の論理の誤りを多数の論理の競合のなかで思い知らされ、そうしてみずから論理を少しづつ現実妥当性の高いものに磨いていくより他に道はないのである。

人間の心ともなれば、その錯綜を描く難しさはいや増すばかりである。人の心はいかにも不安定で移ろいやすい。不快、不安、恐怖の心理に陥った時に、人はとかく自分の心をのぞき込もうとするものであるが、いくらのぞき込んでも自分の心は読めない。読めないのみか、こうした穿鑿が、返ってその人を煩悶と抑鬱におとしめてしまうことさえしばしばなのである。

しかし、私には自分に経験があるのでわかるのだが、必死の努力によって煩悶と抑鬱を文章化すれば、実はその過程で煩悶と抑鬱がともに消失するという実に不可思議な作用が文章にある。人間の心さえこれを文章化させることによって論理化され、それによってみずからを「正す」ことができるるのである。

社会現象、社会現象を動かす人間の心理を言葉によって描写することは至難だが、この至難を乗り越えるのが、社会人文科学を志す人間の仕事なのである。研究所の諸兄よ！ ともに文章を鍛え上げようではないか。